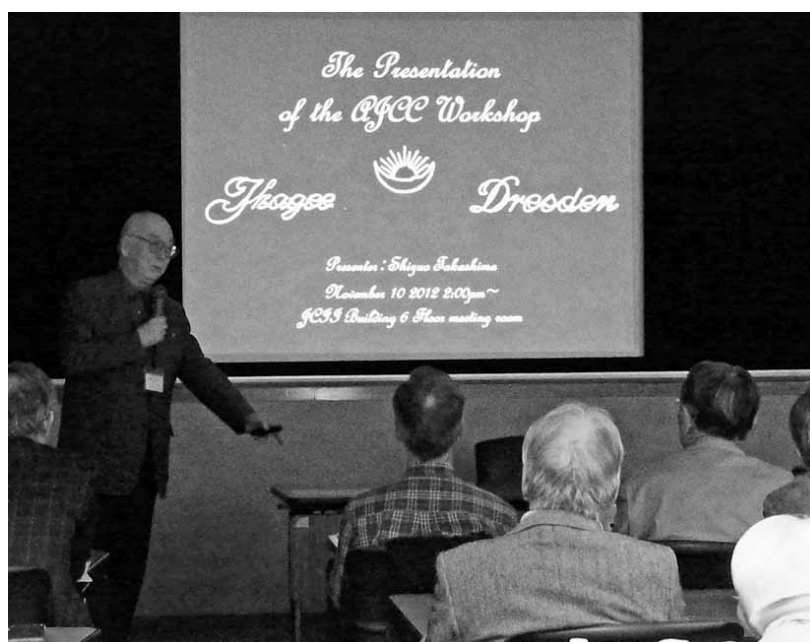


>> 2012年11月 AJCC研究会 << 研究報告

「イハゲーとそのカメラ」

会員番号 0022 高島鎮雄



■研究会テーマを引っ繰り返すとIhagee!

11月の研究発表を何にしようかと悩んでいたところ、総務から「11月の研究会のテーマはG. H. I. だから、それを引っ繰り返してIHG、イハゲーにしたら」というとてもよいサジェスチョンをいただいた。私は別にイハゲー社とその製品の研究者ではないが、近代的な金属製小型精密一眼レフのパイオニアとしてのイハゲー社には興味があるので、研究してみることにした。木製の大型一眼レフは19世紀の半ばに生まれているが、小型のハンドカメラが生まれ、それが金属製になって精度を高めていくに従って衰退していき、1910年代にはイギリスのソホフレックスとアメリカのグラフレックスを例外としてほとんどが消滅していった。あたかもかつて地表を制圧していた恐龍達が、図体が大きすぎたがために短期間に死滅していったことを想起させる。その一眼レフを生き返らせ、今日のデジタルカメラ時代にまで生き長らえさせたのがイ

ハゲー社である。

フランスカメラ展の準備に忙殺されて十分な研究ができなかったが、まずイハゲー社の概史を述べ、ついで主として私の所有機によって製品の歴史を跡付けることとする。

■イハゲー社の概史

イハゲー社の創始者はオランダ人のヨハン・シュティーンベルゲンで、彼は1886年オランダのメッペルという所に生まれた。父は裕福な繊維業者であったが、彼は若くして当時普及の緒についた写真に興味を抱いた。しかし彼は家業の研鑽のためにドイツ東部の大都市ドレスデンに送られる。当時ドレスデンは生まれたばかりの写真工業のドイツにおける中心地の一つになりつつあり、もしシュティーンベルゲンが同市に派遣されなければ、後のイハゲー社はなかったであろう。

と言うのも、間もなく彼の父が亡くなり、オランダの繊維工場は解散されてしまったから

だ。彼はドレスデンに残り、この街で写真への情熱を取り戻す。後にドイツ・カメラ産業の盟主ツァイス・イコン社の本拠地となるドレスデンだが、当時同市で最も大きく、先鋭的なカメラ・メーカーの一つが、後にツァイス・イコンに呑み込まれるエルネマン社であった。彼は無給でエルネマン社に入社、社長ハインリッヒ・エルネマンの許でカメラ作りと会社経営を学ぶ。

エルネマン社を辞し、独立したシュティーンベルゲンは、1912年5月13日に写真機材と付属品を製造、販売するIndustrie-und-Handelsgesellschaft(製造並びに販売有限会社)を設立する。今年はそれからちょうど100年めに当たる。その年のうちに家具工場を買収して最初のカメラを製造する。当時のカメラはまだ木製が主であったから、その製作は指物師の仕事だったのである。

社名が長いというので、1913年Industrie-und-Handelsgesellschaftのイニシャルを綴つ

でlhageとし、これにeをもう一つ加えてlhagee社と改称した(参考文献1)。他に社名の頭文字“IHG”のドイツ語発音に合わせI-ha-gee = ee-hah-gáyとしたとの説もある。

1917年には家具職人のマイスターで、カメラも作っていたエミール・エングリッシュと出逢い、合併してイハゲー・カメラ・ヴェルク・シュティーンベルゲン & Co.となる。製品は典型的なドイツ型のハンドカメラであったが、第一次大戦終了から3年後の1921年、将来のイハゲー社の行く方を決めることになる最初の小型木製一眼レフ、プラン・パフ・レフレックス(乾板用)とロール・パフ・レフレックス(ロールフィルム用)を発売する。

後にイハゲー社が金属製の小型精密一眼レフのメーカーとして大成するのは、実に一人のきわめて優れた技術者によるところである。その人の名はカール・ニュヒターラインと言い、1923年の4月にイハゲー社に入社する。初めは機械工であったが、間もなく設計技術者となる。1932年12月、彼の提唱と主導のもと、127ベスト・フィルムに4×6.5cm判を撮る近代的な全金属製精密一眼レフのプロタイプが完成する。それは翌年エキザクタの名で市販化される。Exaktaの正しい発音はエクサクタで、厳密な、精密な、正確な、というドイツ語の形容詞exaktから生まれた名前である。

エキザクタにはシャッターが1/25~1/1000秒でセルフタイマーもないモデルAと、12秒までのスローシャッターと1/10~6秒までのセルフタイマーをもつモデルBがあり、1934年からはレバー巻き上げも加わり、モデルBでは1935年からフラッシュのシンクロが付く。1936年からは乾板兼用のモデルCも作られ、またエキザクタが高価になりすぎたという反省から、きわめて簡素化されたユニオールも設けられた。これとは別に明るいF2ないしはF1.9のレンズを備えたナハト(ナイト)エキザクタも少数作られた。

この4×6.5cm判のエキザクタは、その後のイハゲー製のほとんどすべての一眼レフ製品の基本となった。その代表作が1936年3月に発表された史上初の35mm一眼レフ、キネ・エキザクタで、一口に言えば4×6.5cm判のエキ

ザクタBを忠実に縮小したものである。第二次大戦後の1950年にはファインダー交換式のヴァレックスに進化、さまざまなバリエーションを経て最終的には1970年のVX500まで、実に37年間も連綿と続いていくことになる。

1939年3月にナチス・ドイツはチェコスロバキアを併合、9月にはポーランドに進攻、ヨーロッパは泥沼の第二次大戦に突入する。1940年ドイツでは民需カメラの生産が中止される。1940年1月と1942年4月のドイツの「敵国の財産に関する扱いの法令」により、ヨハン・シュティーンベルゲンの財産は没収され、管財人の管理下に置かれる。その結果社名からシュティーンベルゲンの文字が消え、単にイハゲー・カメラヴェルクとなる。一方不動産と金融のためのシュティーンベルゲン株式会社が設立され、イハゲー・カメラヴェルク社が同社から土地、建物を借りる形になった。この関係は1971年まで30年間続く。

シュティーンベルゲンは収入こそ保証されたが、自ら築き上げたイハゲー・カメラヴェルクからは追放された。その上妻がユダヤ人であったため、1943年に亡命する。1945年2月13日の連合軍による有名なドレスデン空爆でイハゲー工場は灰塵に帰す。ドイツ軍が降服した1945年5月、イハゲー社は80%が空爆を免れたドレスデンのツァイス・イコン社デルタ・ヴェルクに移転する。

第二次大戦後ドイツは東西に分割され、ドレスデンを含む東ドイツはソ連に占領され、社会主義化された。ドレスデンとその近郊の多くのカメラ工場は国有化されたが、ひとりイハゲー社のみは外国資本のため私企業として自由運営が許された。工場は転々とした末に1958年にドレスデン市内に新築される。経営者や工場長は目まぐるしく変わったが、エキザクタとその普及型として1952年に生まれたエクサを合わせた年産はほぼ10万台を維持し、輸出も好調であった。

だが1960年1月1日に国から全権を委ねられたVEBペンタコン・ドレスデンが設立されると、イハゲー社はしだいにその影響を受けるようになっていく。その一例として1967年にはイハゲー社の設計部門はVEBペンタコンの



エキザクタを生み、1933年以降のイハゲー社の行方を決定づけたカール・ニュヒターライン。1904年ドレスデン生まれ、1945年4月に行方不明になったままだ。

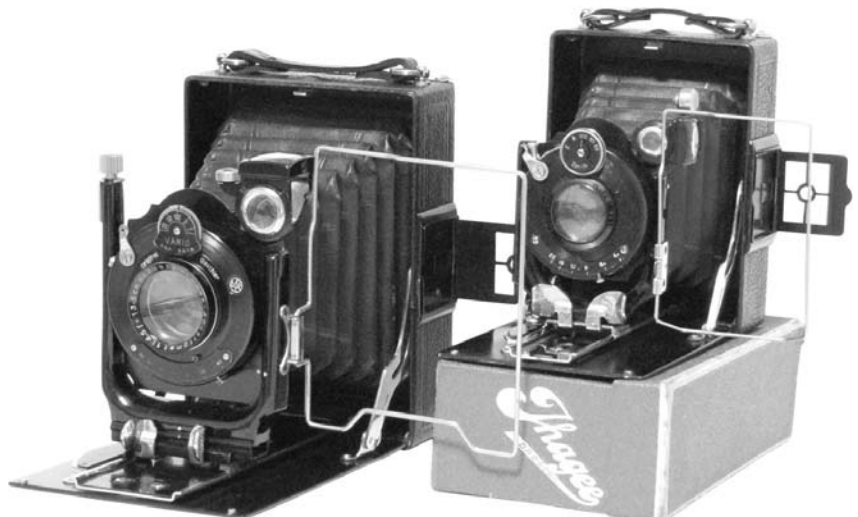
中央研究開発部門に移されて、事実上消滅した。1968年にコンビナートVEBペンタコン・ドレスデンが足立すると、エキザクタ、エクサの販売もそこに移管される。1969年の35mm一眼レフの生産に例をとれば、ペンタコンが16万7000台であったのに対し、イハゲーは9万8407台にも達しており、明らかにペンタコンにとってイハゲーは邪魔な存在であった。1970年に入るとペンタコンのイハゲーへの締め付けはますます強化され、1971年には企業としてのイハゲーは存在しなくなる。エキザクタ・ヴァレックス系の生産は1970年で終わり、最後のエクサが作られたのは1987年であった。

参考文献

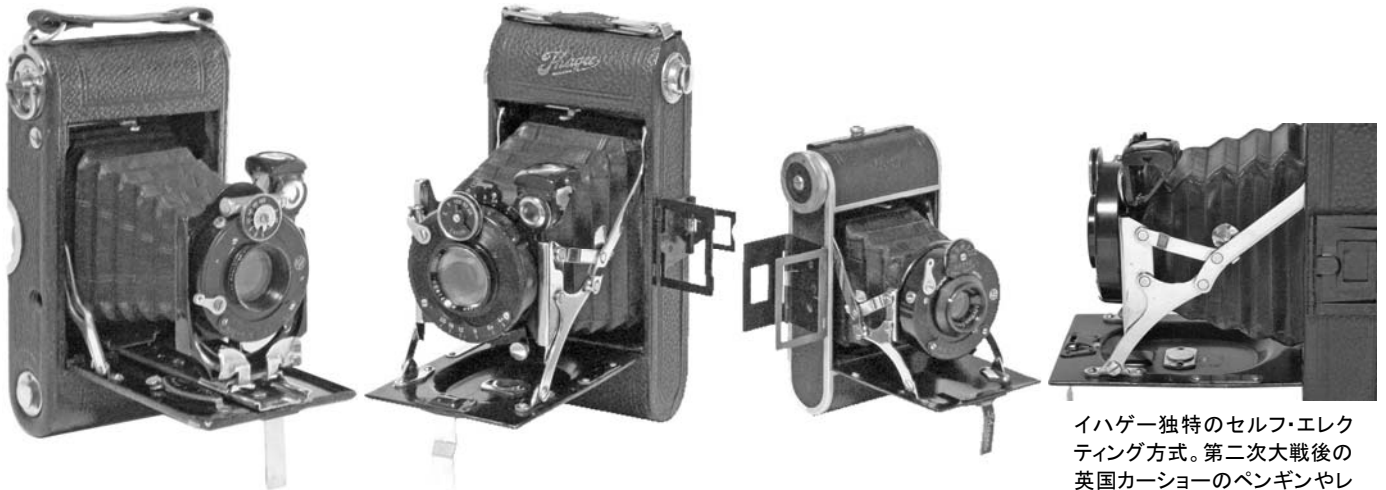
- 1: Richard Hummel著
“SPIEGELREFLEXKAMERAS AUS DRESDEN”(朝日ソノラマにリチャード・クー、村山昇作共訳の“東ドイツカメラの全貌”がある)
- 2: Clément Aguila, Michel Rouah共著
“EXAKTA CAMERAS 1933-1978”
- 3: Klaus Wichmann著“EXAKTA von der KINE-EXAKTA bis zur ELBAFLEX



1912年以降のイハゲー・カメラは典型的なドイツ型ハンドカメラであった。これはそれらの中でも有名だったノイゴルトの6.5×9cm判で、1922年頃のものだ。トロピカル仕上げで、旧コンパー・シャッターまで金色仕上げだ。レンズはマイヤーのフェアプラン105mm F5.5で、2段伸ばし、上下・左右のシフトあり。



1930年代初期のフォトクラブ・ヴィクトル。ラジアル・フォーカスで1段伸ばしのシンプルな乾板用カメラ。右が6.5×9cmでイハゲー・アナスティグマート105mm F4.5付き、左が9×12cmで同135mm F4.5レンズ付き。(山前邦臣氏蔵)



1930年ウルトリックス・ジンプレックス 6×9cm。木製ボディのベースボード型ロールフィルム・カメラ。イハゲー・アナスティグマート105mm F4.5付き、ラジアル・フォーカス。

前蓋を引き下ろすと自動的に組み上がるセルフ・エレクティング方式のアウトウルトリックス。左が1931年の6×9cm判で、イハゲー・アナスティグマート105mm F4.5付き、右は1932年の4×6.5cm判ヴェステンタッシェン・アウトウルトリックスで同70mm F6.3付き。

イハゲー独特のセルフ・エレクティング方式。第二次大戦後の英国カーショーのペンギンやレイヴンなど、多くのカメラに影響を与えた。



ヴェステンタッシェン・アウトウルトリックスの蛇腹の代わりにダブル・ヘリコイドを付けて1931年に生まれたのがクライン・ウルトリックスで、すぐにバルヴォラと改名された。同じボディで4×6.5cm判と3×4cm判がある。これは3×4cm判のビオター45mm F2付き。



1933年ツヴァイフォーマット・アウトウルトリックス。テッサー105mm F4.5を直進ヘリコイド・マウントに入れた高級機で、4.5×6cm判と6×9cm判のダブル・フォーマットや裏蓋が乾板兼用になったものもある。



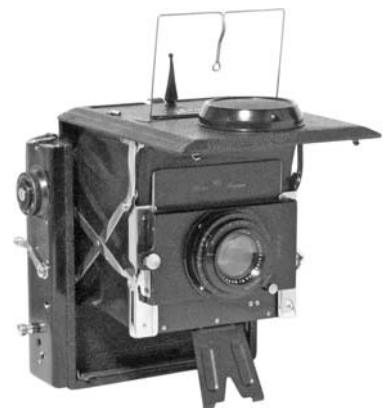
イハゲーが後に一眼レフ専門になるきっかけとなったのが1921年に発表された木製の小型一眼レフ、“パフ”レフレックスで、シンプルなミラーシャッターをもつ。左は1923年の120フィルムに6×9cm判を撮るロール・パフ・レフレックスで、F11の単玉付き。右は4.5×6cmのアトム判乾板用プラン・パフ・レフレックスで、トリオプラン80mm F6.8付き。



ロール・パフはバックを外してフィルムを装填するので(途中交換はできないが)ハッセルブラッドの遠い祖先といわれる。



木製一眼レフは大きくぐろっとして携帯に不便だ。それなら小さくするためには、というので多くの折りたたみ一眼レフが作られた。そのイハゲー版は1924年発表のペナント・クラブ・レフレックスで、この9×12cm判は1925年の発売。ストレートバックだが、後にRBのものも作られた。



折りたたみ一眼レフの多くはピントフードをたたんだまま、プレスカメラとしても使えるようになっていた。この場合、正しくは邪魔なレンズキャップは外す。150mm F4.5のテッサー付き。



撮影時と携帯時のサイズの比較。左の写真のようにたたむとやや大柄なハンドカメラくらいになってしまう。



1934年に発表された4×6.5cmベスト判のエキザクタ。これはシンクロの付いた1935年のモデルB、バージョン4。キネ・エキザクタ以降ではレンズ・バヨネットのロックになるレバーは、ベスト判ではダブル・ヘリコイドの無限位置の設定用になっており、レンズは先端のスクリューで脱着する。イハゲー・アナスティグマート75mm F4.5付き。



エキザクタがレフトハンダーなのはこうして巻くからだ、というのはミノルタやマミヤで多くのカメラを設計し、かつてAJCCメンバーでもあった故宮部甫(はじめ)さんの説。もう一つ、顕微鏡撮影ではこの方がやり易いからだという説もある。



ベスト判にはマイヤー・プリモプランF1.9、シュナイダー・クセノンF2、ツァイス・ビオターF2(以上80mm)、ダルメヤー・スーパー・シックスF1.9(3インチ)などの明るいレンズを固定装着した“ナハト・エキザクタ”があった。これは1935年のモデルB、バージョン4仕様のビオター付き。



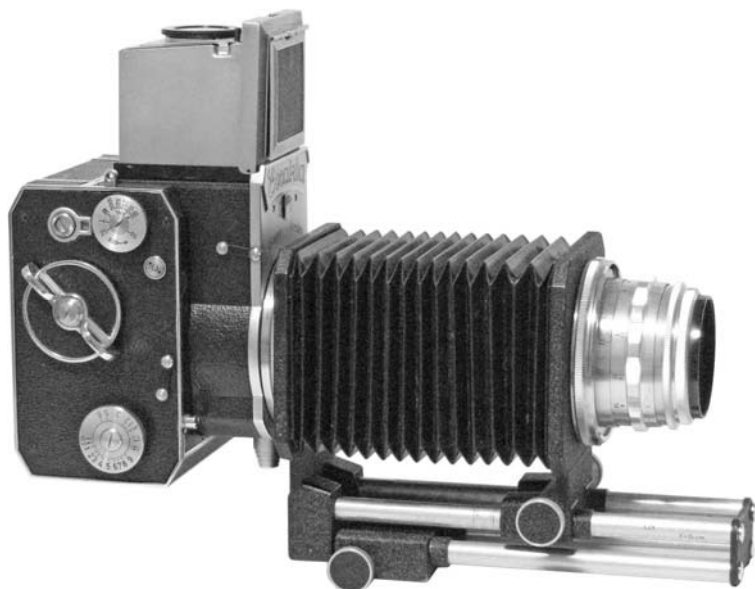
ベスト判のエキザクタを120フィルムのスクエア・フォーマットに発展させた1938年のエキザクタ66。シャッターは基本的に同じだが、巻き上げレバーは底面中央に移された。バヨネット・マウントのテッサー-80mm F2.8付き。戦争のため1200台足らずの生産に終わった。



1953年に復活した戦後型のエキザクタ66は一転して縦型になった。しかしこれもシャッターは基本的に同じものを縦に組み込んでいる。レンズは新しいバヨネット・マウントのテッサー-80mm F2.8。



戦後型66はマガジンバックを外してフィルムを入れるが、途中交換はできない。



戦後型66Iにペローズを装着した近接撮影時の姿。



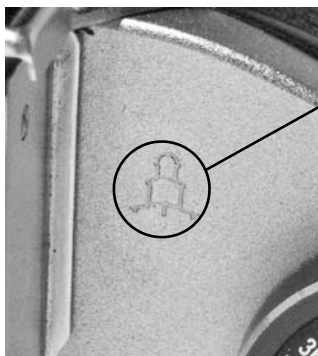
1936年のライプツィヒの新春博覧会で発表された史上初の35mm一眼レフ“キネ・エキザクタ”。基本的にベスト判のモデルBを忠実に縮小したもので、円いマグニファイアをもつのは最初のバージョン1。テッサー50mm F3.5付き。



円いルーペはこうしてファインダー像を拡大して見るためのものだ。1937年のバージョン2からルーペは矩形の大型になる。レンズはテッサー50mm F3.5。



第二次大戦後の1950年にエキザクタはファインダー交換式のヴァレックスになる。その後細部の異なる多くのバリエーションが生まれるが、これはクラシックなエキザクタの究極的なモデルと言われる1958年のIIa。ネームプレートが刻印ではなく浮き文字。レンズは半自動プリセット絞りのビオター58mm F2。



このVX500には、何とペンタコン・タワーが刻印されている。この刻印がある最後の歴史的カメラなので入手した(写真は上下逆になってる)。



1967年のフォキナで35mmエキザクタのボディダイキャストが初めて一新され、断面が角ばった。これはドレスデン製エキザクタとしては最後の1969年VX500。シャッターは1/500秒までしかなく、スローもセルフタイマーもない。ペンタプリズム・ファインダーは1960年頃までのものを付けてある。レンズは外部自動絞りのドミプラン50mm F2.8。



1985年エクサ I c。上下カバーやファインダー・フードがプラスチックになった最後のエクサ。レンズマウントはM42で、内装自動絞りが付いた。装着レンズはテッサー50mm F2.8。実はエクサ Iには1973年からM42マウントがあった。



(写真上)

1952年にエキザクタより一回り小さく、シンプルなミラーシャッターをもつ普及型のエクサが生まれた。写真は右から1957年のバージョン4でテッサー40mm F4.5付き、1958年の浮き出し文字のバージョン5で50mm F2.8テッサー付き、1956年のバージョン3システム・ラインメタルでメリター50mm F2.8付き。後者はドレスデンのイハゲの生産能力が不足したので、ゾンメルダのラインメタル工場で生産されたもの。



1959年にはペンタプリズムを固定装着し、ミラーシャッターを縦走りフォーカルプレーンに高級化したエキザクタとの中間型エクサIIが発表された。1966年には最速1/250秒を1/500秒にスピードアップしてエクサ500に発展した。これは対米輸出用なのでエキザクタ500名になっている。



(写真左)

1966年には旧シュティーンベルゲン系の資産を集めて西ベルリンにもう一つのイハゲ・カメラヴェルクを設立、このエキザクタ・レアルを630台作り作った。ドレスデンのエキザクタとはまったく関係のないカメラで、複雑で故障し易い。